

強者の戦略

【第12回】英作文2（上本）

前書き

新年明けましておめでとうございます。今年度の強者への道も本題を含めて残り2題となりましたが、宜しくお付き合いの程お願いします。

それでは年末に出題したテーマの解説に入りましょう。今回は、「英作文」として総合的なテーマに設定しました。答えは準備できていますか？

まず、問題文の確認です。

【問い】 次の和文の下線部を英訳しなさい

(1) ある講演会の席上で、私がどうして地域に文化活動が必要かといったことを、ひとくさりダラダラとしゃべったら、そのあとにこんな質問が出た。

(2) 「たしかに、あなたの言っていることはいい話だが、それにしても芝居のチケットに五千円は高すぎる。」

うーん、これは半分正しく、半分間違っている。

解答例は2パターンに分けて解説しましょう。ちょうど第2回強者への道で進行したように、**今持っている知識でどう書くか**（手持ちの知識を駆使して書ける英文レベルからの視点）と、**洗練された答案にはどのような工夫がなされているか**（目指したい英文レベルからの視点）という2つのアプローチで展開したいと思います。

Bottom-up approach : 今持っている知識でどう書くか

1 ひとくさりダラダラとしゃべったら、そのあとに

いかにも日本語らしい（物好きはきっとニヤッとしてしまう）表現で、第一関門になるような箇所ではないでしょうか。まず、「しゃべったら、そのあとに」とある部分は「しゃべったあとに」と繋げると書きやすくなります。このように**日本語における指示語は必ずしも忠実に英語に表現する必要がない**場合が多くあります。

また、「ひとくさりダラダラしゃべ」という箇所も「長い演説を終える」と置き換えれば、ひとまず言い表すことができます。より厳密に表現したい場合は「多くの時間を費やして一通りの話をし終えたら」とすることもできます。

2 こんな質問が出た

「出た」に相当する動詞を探します。"come out"でも OK です。ただ今回はもう少し踏み込んで、「あとに→出た」の流れを深めてみましょう。「あとに→出た」と言うことは「あとに→続いた」となり、「私の講演に→質問が**続いた**」という**順序**が伺えますから、ここでは**"follow"**が使えるとピッタリ来ます。"S followed"で「Sが続いた」と表現できそうです。

ただし、注意しないといけない点があります。「こんな質問」に対して"question"と

強者の戦略

を使ってしまうと、(2)の答案を疑問文にしておく必要性が出てきます。日本語における「質問」の訳語を、"question"とするのか、それとも(2)の答案を疑問文にしないことを念頭に置いて"opinion"などで代用するのかはあらかじめ考慮しておく必要があります。

③ それにしても

この訳出にももどかしい思いをした人もいたのではないのでしょうか。"anyway"「いづれにせよ」で良いのか、他なる表現を探すか、探すとするばどう書くか…、いっそなくても通じるんじゃないのか、など勘ぐってしまうところです。

まず、anywayでも問題なく表現できます。ただ、butの後のanywayは文末に置くのが一般的なので、置き場所もよく考えて使います。

- ④ We are all well aware that leaving your bicycle on the street is against the law, but lots of us do it **anyway**.
(自転車の路上放置は違反だと分かり切っているのに守らない人が多い)

また、"anyway"以外にも書き方はあります。「たしかに～だが」が譲歩表現になっていることに着目して、althoughを使い、さらに接続詞 althoughと相関的に用いる副詞 neverthelessを主節に添えます。特定の接続詞と相関的に用いる副詞があるので以下に載せておきますね。

- ④ **If** this is the case, **then** we must help him at once.
(もしこれが事実なら彼をすぐに助けなければならない)
- Although** I was very tired, **nevertheless** I was unable to sleep.
(私は疲れ切っていたがそれにもかかわらず眠れなかった)
- Just as** the lion is the king of beasts, **so** the eagle is the king of birds.
(ちょうどライオンが百獣の王であると同様にワシは全ての鳥の王である) ※ just は省略可

"**if s'v'. then SV**"「s'v'ならば、(そうならば) SV」、"**although s'v'. nevertheless SV**"「s'v'だけれども、(それにもかかわらず・それでもやはり) SV」、"**(Just)As s'v'. so SV**"「ちょうど s'v'するように、(そのように) SV」のように主節の前で then や nevertheless、so を用いることがあります。働きとしては、主節を切り出す前にワンクッション置くようなテンポコントロールになります。実際、()内の日本語がなくても文意自体は通じますから、和訳の際にはこれらの副詞を日本語に訳さなくても良い場合が多くあります。そこで今回の英作文ではそれを逆手にとって、訳さなくてもいいような「それにしても」を相関的に用いる **nevertheless** に託す方法を取ることもできるわけです。

◆ 上記 ①～③ を利用し、文法面も注意しながら丁寧に書くと以下ようになります。

- (1) **At a lecture, after I made a long speech as to why we need cultural activities in local areas, this opinion followed.**
- (2) **Although what you have told us sounds respectable, nevertheless 5,000 yen for a ticket to a play is too much.**

強者の戦略

さらに別解。先ほどの解答例から少々手を加えました。

- (1) **At a lecture, on my finishing a long speech about why cultural activities are needed in each area, someone asked me a question like this.**
- (2) **Certainly I agree with your opinion, but why should I pay as much as 5,000 yen for a ticket to a play?**

別解では "a question like this" からの導入で **修辞疑問文** を利用しました。筆者が「半分正しく半分間違っている」と評しているところから、この「質問」は「質問」の様相を呈した「意見」であることが伺えます。この意図を汲み取って修辞疑問という技法を使って **意見的な言い回し** にしています。

また、「高すぎる」に **as ~ as の強意用法** を用いました。この用法では、一般的に **as ④ [③] as の後に数字** が続き、「**~も**」と訳すことが多い用法です。「同じ位」という意味で2者を比較する用法とは異なります。

- ④ as much as 10,000 yen : 1万円も / as many as 5,000 stamps : 切手5千枚も
as early as 12th century : 12世紀もの早く / as often as 15 times : 15回も

「どうして五千円も払わないといけないのか（高すぎだろ!）」という書き方をすれば発話者の心理を裏に込めることができた絶妙な「質問」になります。

Top-down approach : 洗練された答案にはどのような工夫がなされているか

- (1) **After I spent much time giving the whole lecture about necessity for cultural activities in each local community, from the audience came a remark:**
- (2) **"True, your opinion is reasonable, but I can't understand why I should pay as much as 5,000 yen for a ticket to a play, anyway."**

1 新情報と倒置構文の利用

「こんな質問が出た」という箇所を "from the audience came a remark" と表現しました。この文の主語は a remark で、**倒置形** になっています。ここでは情報展開（詳細は第8回『強者への道』参照）を考慮しています。

情報展開 ①（講演） → ②（観客） → ③（発言） → ④（発言内容）
from the audience a remark 下線部(2)

どうして地域に文化活動が必要かについての「講演」、そして旧情報ではないとしても内容上講演と強い結びつきを持つ「観客」、その観客からの「発言」、そして下線部(2)の「発言内容」への流れを作っています。旧情報を文頭に置くのと同

強者の戦略

じ理屈になりますが、**内容上突拍子もないものを接近させると情報展開が不自然になる**ので、旧情報でなくても「講演」から連想されやすい「観客」を文の前方に配置しています。（実際②と③が逆転すると、「講演」からは連想されにくく、誰のものかが分からない「発言」という情報が先に来て、それを追うように「観客から」となってしまうので自然さが劣る書き方になります。）

また、文法的な話になりますが、倒置についても説明しておきますね。「否定副詞を文頭に置いたときには倒置が起こる」というのはOKですね。他にも「場所副詞が文頭に来た時に倒置が起こる」というパターンもあります。例を見ましょう。

- ⑧ In the bottle was a letter. (瓶の中には手紙が入っていた)
On the top of the hill stood an old chapel. (丘の上には古い教会が建っていた)
Down came the rain. (雨が降ってきた)
Into the house walked a man. (家の中へと男性が歩いて入っていった)

場所副詞が文頭に置かれる倒置になりますが、パターンは以下の通りです。

1. 場所副詞 + 存在系 V+S
2. 方向副詞 + 運動系 V+S

今回の英作文でも "from the audience came a remark" と 2. の倒置パターンを利用して書きました。

2 necessity

「『どうして地域に文化活動が必要なのか』についてしゃべる」という**疑問形**を「『地域における文化活動の必要性』についてしゃべる」と**名詞化**して表現しました。他にも以下のような語も疑問的な訳を受ける名詞になります。

- ⑨ (彼女がどれ程美しいかはヨーロッパ中に知れ渡っていた)
→ Her beauty was well known all across Europe.
(地球から太陽までどれくらい遠いか知っていますか)
→ Do you know the distance from the earth to the moon?
(どれくらいの距離を私たちが得られるかが成功できるかどうかを左右する)
→ The amount of support we can have will decide whether we will succeed.
(この本はこの 50 年間で家庭環境がどれほど変化したかについて論じている)
→ The book discusses the extent to which family life has changed over the past 50 years.

このように抽象名詞は疑問的に和訳できる場合があります。**間接疑問文を使うような場合に、抽象名詞化して英文をすっきりさせる**方法もありますので、名詞中心の英語の特性を活かして英作文する一つの手段になります。

※ただし、名詞化することによって読み手にとって構造把握しにくくなってしまったり、書き手が文法的なミスを起こしてしまうことがないように、細心の注意を払うことが必要です。伝わってはじめての言語ですからね。

強者の戦略

3 いい話だが…

「いい話」を "a good story" としてしまうと「物語」っぽく感じられてしまうので、"story" は避けて "a good speech" あるいは "a good lecture" を使います。ただ、ことさら "What you have said is a good speech" と、わざわざ "speech" を使わなくとも、"what you have said" は "speech" なのだから、形容詞 good だけで済まして問題ありません。（ちなみに make a speech とは言いますが、make a lecture とは言わないので注意してください→ give a lecture）

そこで "good" を使っても問題ないと記しましたが、別段、語選択にはもっとこだわりを持ちたいところです（good / bad 「いい/わるい」だけだとどうも拙さを感じられてしまいます）。ここでは論理関係を意識して訳語を選択します。「**だが**」の前後が対比的な内容になっているので、解答例では "I can't understand why..." に対する訳語として "**reasonable**" を使いました。「あなたの言っていること＝納得できる」だが「芝居のチケットに五千円＝納得できない」という対比関係を意識的に作り上げます。このように "reasonable" を選択すれば、but の前後でコントラストがより鮮明になり、ポイントが際立つパンチの利いた英作文になります。

後書き

いかがでしたでしょうか。英作文にはいくつもの解答があり、ある程度の自由をもって自分なりに取り組めるのが醍醐味だと思います。英作文を上達させるには、「良いものに触れ、その良さを味わう」こと。つまり、美文を追究するために、美文そのものに触れ、またそれを手にするための方法論を知ることが肝要だと常々思います。良い例文を見かける度に例文集ノートに写していくのも手かもしれません。

さて、高校3年生はまもなくセンター試験ですね。良い結果でありますように。また、3年生も含めて、1年生2年生にとっても、今年が良い一年でありますように。心よりお祈り申し上げます。